

総論 外国人労働者と「共に働き・共に暮らす」社会のために

「生活者」としての外国人と共に暮らす ～豊中市社会福祉協議会における 多文化共生の取組みから考える～

執筆 長島 洋介

ラボラトリオ株式会社 マネージャー

勝部 麗子

豊中市社会福祉協議会事務局長・コミュニティソーシャルワーカー

豊中あぐり会員／多文化共生ボランティアメンバー



勝部 麗子氏

外国人労働者の受け入れと 「生活者」

日本政府は、外国人人材を主に「労働力」として捉え、経済成長や深刻化する人手不足の解消を目的として、その受け入れを拡大する方針を採っている。この傾向は、2018年の「経済財政運営と改革の基本方針」（いわゆる「骨太の方針」）において、従来は限定的であった非高度外国人材に対しても、就労を目的とした新たな在留資格を創設するという政策転換に明確に示されている¹⁾。しかし、日本で生活を営む外国人は単なる労働力ではなく、家族を持ち、地域社会の一員として日々の生活を送り、年を重ねていく。政策的視点の背後には、こうした誰もが同じ「生活者」であるという、当然の事実が見過ごされている側面がある。

日本で暮らす外国人は、言語の壁、文化や習慣の違いから生じる摩擦、誤解や偏見等を通じて、多様な生活場面で困りごとに直面しうる²⁾。そのような中で、国内労働人口の減少を背景に、中長期的な外国人労働者の受け入れ政策が存在しているとは言いがたい。その結果、外国人住民の生活支援や地域での共生に必要な基盤整備（日本語

教育、子育て支援、医療アクセス、高齢者福祉など）への投資や制度設計が遅れ、彼らが「生活者」として不安定な立場に置かれやすい構造が生み出されていると言える。日本滞在の長期化・永住化も進む中で、彼らを単なる一時的な労働力としてではなく、地域社会を共に構成する一員として包摂し、共に生きる「多文化共生社会」の実現が、日本社会にとって喫緊の課題ではないだろうか。このような社会の実現のためには、国や自治体レベルでの制度設計の見直しと共に、地域住民レベルでの理解と協力が不可欠だろう。

そこで、本稿では、外国人市民が日本で生活する上で抱える多岐にわたる困難の実態に対して、特に大阪府豊中市及び同市社会福祉協議会（以下、豊中市社協と略す）の活動から、地域で彼らと共に暮らすためにどのような取り組みが必要なのか、課題は何かを考える。今回は公開されている情報に加えて、豊中市社協のコミュニティソーシャルワーカー・勝部麗子氏と豊中あぐり（都市型農園を拠点とした地域活動グループ）のメンバーへの取材を通じてまとめている。そして、全ての人が互いの違いを認め合い、尊重し合える多文化共生の社会の実現に向けた論点をまとめた。

豊中市社協の取組み① 外国人市民の概況とセーフティネットとしての社協

豊中市社協は、先駆的に地域共生に向けた多様な取組みを推進している。地域住民が抱える様々な福祉課題の解決に向けて、住民自身が主体となった地域づくりを目指し、行政機関、関連専門機関、ボランティア団体、NPO等、多様な関係者と連携・協働しながら、地域福祉を推進する中核的な役割を担っている³⁾。

活動地域である豊中市は大阪府の北部に位置し、大阪市のベッドタウンとして発展してきた約40万人の都市である（豊中市推計人口、令和7年5月1日現在）。大阪都心部へのアクセスが良好で、大阪大学のキャンパスや外資系企業も市内・近隣地域に見られる。そのような都市環境下で、2022年9月末現在、豊中市には92か国6,471人（無国籍含む）の外国人市民が居住し、2012年時点と比べて1.4倍ほどになっている⁴⁾。国籍別に見ると、韓国・朝鮮が最も多く、次いで中国、ベトナム、フィリピン、インドネシア、ネパール、米国、台湾の順となり、特に中国・ベトナム・ネパールの外国人市民の増加が著しいように見受けられる。

2022年に実施された「豊中市多文化共生に関するアンケート」の報告書によると、在留資格は永住者、技術・人文知識・国際業務、留学の順で多く、前回調査と比べて、永住者・特別永住者・留学の割合が大きく減り、変化も見て取れる⁴⁾。特定技能等、近年設けられた形での滞在も見られ、多様な背景を持つ外国人住民がこの街で生活していることがわかる。また、同じ調査から、「話す」「聞く」「書く」「文字を読む」「文章を読む」といった日本語能力について、

日本人と同じくらいできるとする割合は前回調査より全般的に低くなっている。暮らしの困りごとに関する設問（「あなたは日本での暮らしで次のようなことがありますか」）では、ひとつ以上選んだ人が回答者の58.3%となり、個別にみると、「文化や習慣のちがいを理解されない」が20.4%と最も多く、次いで「外国人であることを理由に、家を買うことや借りることをことわられる」が18.2%となり、これらは前回調査よりも回答割合が増えている。

このような状況の中、豊中市では「多文化共生指針」が作成されており、2024年改訂版において、多文化共生のネットワーク「多文化まなびあいネット」の一員として豊中市社協が記載されている⁵⁾。中でも、外国人市民が地域社会で安心して生活を営むためには、まずその基盤となるセーフティネットの存在が不可欠であり、豊中市社協がその役割を担っている。前述の「豊中市多文化共生指針」に掲載されたコラム「『廃棄食材』でつないだ日々」において、経済的に極めて厳しい状況に置かれた外国人住民に対し、豊中市社協から提供された支援用食糧を渡したという記述がある。外国人住民が失業や病気など不測の事態により生活困窮に陥った際に、最初の緊急避難的な支援として、社協が具体的な生活維持を支える重要な役割を担っていることを示している。このような物質的支援は、単に飢えをしのごとという物理的な意味合いだけでなく、困難な状況にある外国人市民に対して、地域社会から見捨てられていないという安心感や、社会とのつながりを実感させるという心理的な支えとしての意味も持つ。また、外国人市民が抱える日々の生活の困りごとから接点を持つことは、従来の交流事業とは異なる層へのアプローチとして、これから更に重要性が増すもの

と捉えられていた。

豊中市社協の取組み②

タブボラの活動と、結成までの経緯



たこ焼きパーティーの様子「和居輪居」にて

前述のような緊急時の問題に加えて、そもそも、外国人市民が地域社会で孤立せず、その一員として主体的に生活していくためには、生活基盤の安定だけでなく、日本人住民との相互理解を深め、地域と交流できる機会を確保することが不可欠である。特にコロナ禍以降、豊中市社協では、より生活の中に溶け込んだ活動も進めている。それが以下に示す「多文化共生ボランティア（通称、タブボラ）」である。豊中市社協は、その基幹事業の一つとしてボランティアセンターを運営し、地域住民のボランティア活動や様々な地域活動への参加をコーディネートし、支援している。外国籍の方からの相談が増えたことを背景に、令和5年（2023年）4月から外国人支援に関わるボランティアグループを立ち上げている。それがタブボラである。

このタブボラは海外赴任経験者など、語学や異文化理解に関心のあるシニア層を中心に、外国人市民との交流や、ちょっとした困りごとをサポートするボランティア活動となる。正式結成は2024年4月からに

なるが、その前年、2023年12月の多文化共生ボランティア講座から活動を開始し、初回から約40名の参加者となっている。そこから、話し合いや外国人市民との交流会を重ねて、結成に至っている。タブボラでは、たこ焼きパーティーや、互いの文化活動（盆踊り・歌など）を通じた交流、子どもの宿題の手伝いなど、草の根の活動に取り組まれている。たこ焼きなどの食による交流は、互いの食文化だけでなく、宗教などの多様な社会的背景を知る機会にもなっている。ネパール・フィリピン・南スーダン・ウクライナ等でグループ分けをして、それぞれのメンバーで応援を続ける中で、引きこもりの子どもが通学できるようになったり、コロナ禍で就職に困っていた若者の暮らしを支えることなど、個々の支援にもつながっている。

同時に、アウトリーチ型の取組みも積極的に行っている。例えば、塗装業で働く外国人市民が住むアパートに食材支援で入った際に生活調査も実施していた。職場の人や同じ国からの移住者以外との交流が限られている様子が見られる中で、フットサルが話にのぼれば、フットサル交流会を企画・開催している。労働事情に合わせて平日夜に開催するようにしつつ、周囲の自治会、民生委員にも声をかけ、働く彼らの生活実態を知る機会にもしている。他にも、外国人市民が通う定時制高校の様子が見えた際には、食事情にあった食事を提供する夜桜 YELL 食堂を開催し、「応援してる人がいて、自分たちが何か困ったときには、日本人でも信じられる人がいる」ことを感じ取ってもらえるつながりづくりが大切にされている。こうした活動の根っこには、「相手が望む、喜ぶアウトリーチをすること（勝部氏）」がある。

豊中市社協は前述のセーフティネット機

能を果たすとともに、こうしたボランティア活動を組織しながら、それぞれの強みを生かした支援活動を展開している。社協の枠組みでは担いにくい部分を、実際の暮らしの中で接点が多いタブボラの市民メンバーが補っていく形となっているといえる。また、2024年7月には、豊中市で活動するとよなか国際交流協会・国際交流の会とよなかの活動紹介や、外国人支援の課題について学ぶなど、タブボラ向けの研修会を開催するなど、活動全体の推進役となっている。



フットサルの様子

豊中市社協の取組み③ タブボラ結成までの経緯と「豊中あぐり」



和居輪居の外観

こうした活動に至った契機として、コロナ禍での特例貸付等、豊中市社協として緊

急時の支援の中で、困りごとを抱えた多くの外国人市民との出会いがある。言語の違いや、共同生活などの文化の違い等、日本人市民とは異なる課題も感じる中で、地域福祉の視点から豊中市で生活している彼らの姿がより鮮明となり、日本語が話せず、いろいろな国籍の子どもが困っている現状も見えてきた。

そして、2023年、都市型農園を営む「豊中あぐり」のメンバー2名にこうした外国人市民の現状を話したところ、海外赴任の経験があるという話になったという。改めて「豊中あぐり」の参加メンバーに目を向けると、ちょうど高度経済成長期以降、多文化経験のある人たちがいることに気づき、同年12月の多文化共生ボランティア研修会の計画に至ったというわけである。なお、この最初に話をした2名のメンバーは現在の中心メンバーであり、本取材に協力いただいた方となる

この「豊中あぐり」は定年後の男性の居場所づくりとして勝部氏が立ち上げた「都市型農園」の活動グループであり、「都市型農園を拠点に人と人との繋がり、ふれあい、認め合い、支え合う共同空間を創造することで社会参加を促進し、地域福祉の担い手づくりを目指す⁶⁾」グループである。収穫された野菜は朝市などの地産地消のイベントや移動販売車で販売されたり、子ども食堂や生活困窮者支援の一環として提供されたりしている。こうした6次産業化に挑戦するとともに、住民・子どもとの交流・協同作業を通じて、地域福祉の拠点にもなっていることがもう一つの特徴で、「地域共生ホーム 豊中あぐりプラス 和居輪居」という場所も持たれている。

こうした地域福祉・地域共生の土台がある中で、立ち上がっていったものが、タブボラとなる。タブボラの活動を進める中で、

「海外赴任中にビジネスのために経験してきたことを、帰国後、日本で多文化共生に活かせる」ということは、大きな気づきだったという。海外での暮らしを経験しているからこそ、知識としてだけでなく、異文化を体感している市民として、外国人市民の側にも日本の側にも立てる。つまり、こうした経験者が多文化共生の鍵になることが大きな発見（勝部氏）だったということである。



豊中あぐり 外国の人たちとの活動の様子

実際、タブボラのメンバーは、海外で「外国人市民」として暮らした経験を踏まえたボランティア活動になっているような語りも見られた。このような視点で活動できる背景には、海外で生活したり、自分の子どもと異国で暮らした経験があるから、気づけることもあるという。

- 外国人市民と地域住民の交流の場面では、なるべく日本語で話すようにしてもらい、意思の疎通が難しい場面では現地語で仲介する。
- 宿題を手伝う際に九九等の教え方を工夫するなど、日本の学校に日本語を話せない子どもが超えられないハードルがあることを学んでいる。
- 海外の子どもたちは友だちがいなかったり、閉鎖的な環境にあるので、

私たちは子どもに目を向け、「遊ぶ」「(収穫等) 一緒にする」ことを通じて友達のような関係を創る。

- ベースに生活苦を抱えている人をフォローしていく中で、時には海外の踊りを教えてもらったりと、「ここには安心できる人がいる」と感じてもらえるつながりができてきた。

このように活動が展開していった背景には、豊中市社協が推進してきた「地域共生」の考え方があり感じ取れる。勝部氏からは「共生は支える側も参加、支えられる側も参加だから、一面的には支援される側が支えられるけれど、その人たちにもきつと役割がある。役割が出てくると、その住民としてのアイデンティティにつながる」という話があった。前述の点も、一般的には、高齢者は支えられる側として捉えられがちだが、そもそも高齢者は支える側にもなれるという考え方が豊中市社協の取組みでは根付いている。こうした考えは、多文化共生の文脈でも、息づいている。実際、取材の中で、防災訓練について以下のような例示があげられた。

これまでの地域での防災訓練では、外国人市民に向けて「参加できます」といった案内であったものを、「是非、積極的に参加してください」という呼びかけに変えたところ、若い人が多い外国人がバケツリレーでの活躍を目にすることになった。すると、地域の人も「自分たちが支えてもらえる」という気づきのきっかけになるという。そのようなプランニングの大切さが語られた。外国人市民のニーズとしても、労働者として日本に来て、「友だちが作れない」「余暇に遊ぶことがない」ということに加えて、「社会貢献する機会もない」という声も見られ、次は外国人が地域のボランティアと

して参加する企画を進めているという。

豊中市社協・タブボラからの 多文化共生に向けた学び

以上、タブボラの取組みに関する取材から、以下のようなポイントが見て取れた。

①アウトリーチ型支援

- 困っている人のところに直接出向く「相手が望まれるようなアウトリーチ」を行う。そうすることは既存の多文化交流で逃しがちな対象ともつながることができる。

②「遊び」「共同体験」を通じた関係構築

- タコ焼き、フットサル、文化交流、食事、収穫体験など、共に楽しむ活動を通じて心の壁を取り除かれている様子が見られた。こうした継続的な関わりを通じて信頼関係が構築されている。

③経験者の活用

- 海外経験豊富なシニアが、その経験や語学力を活かしてボランティアとして活動している。深い交流のためにも、タブボラメンバーのような意欲を持った媒介役が重要な役割を担う。

④「地域共生」の考え方

- 支援する・されるという一方的な関係ではなく、外国人にも役割があり、日本人が助けを必要とするということもあるという考え方のもと、地域の一員としてどう迎えるか、という発想の転換が重要となる。

また、外国人市民との多文化共生に向けて課題に感じていることを伺ったところ、以下のような論点が語られた。

①市社協・タブボラが関われる問題の範囲

- ビザの問題、文化的な考え方の違いなど、支援者がどこまで踏み込めるか、難しいことがある。加えて、タブボラとして子どもたちと関わる時、どこまで住み続ける意向があるか、親の希望にどこまで答えるか、限界を感じることもあるという。

②コミュニティへの溶け込み

- 暮らし続けようと考えたときに、コミュニティへの溶け込みにくさは課題であり、学校のような接点となりうる場面がある子ども以上に、親のコミュニティを仕事以外でどう創っていくか、が課題。如何に地域の一員として受け入れていくか。また、同じ都市の中でも地域によっても生活水準や在留資格も異なる中で、受け入れ方が変わってくる。

③外国人市民と地域をつなぐ媒介者の掘り起こし

- 外国での経験を活かせる人材は潜在的にもの、そうした人を掘り起こし、活躍の機会に繋げられる場所・仕組みが日本にはあまりない。いろんな外国人と接した経験のある人をどれだけ繋げられるか。民生委員をサポートする外国人支援の福祉委員を置くのも一つ。

最後に、生活協同組合への期待として、以下のことがあげられた。

- 食を通じて人の輪を作ること（出会う機会を作ること）
- 個別配達等の機会を活かして外国人市民と「出会うこと」

まとめとして

外国人住民の多様化・複雑化はこれからも進む。外国人住民の高齢化は日本全体で進行しており⁷⁾、介護サービスの利用における言語・文化の壁、情報不足、孤立といった問題が更に多様化することが容易に想定される。また、その家族、特に日本で生まれ育つ子どもたちの教育支援や日本語能力の獲得、アイデンティティ形成支援⁷⁾は重要な課題である。豊中市社協とタブボラの取り組みからは、これまで培ってきた地域福祉のネットワークを、外国人支援という新たな文脈で応用、展開し、個別の問題ではなく、地域共生社会づくりという大きな視点で取り組まれている様子を感じ取ることができた。共生という言葉は、実感を持って関わるのが意外と難しい。共生を意識したコミュニティの拠点に多彩な機会があって、多彩な人がいる。そうした交流から見えてくるものを出発点とする流れは、多文化共生だけではなく、いろんな共生のあり方に通ずる。

改めて、当初の課題意識に目を向ける。「技能実習」や「特定技能1号」といった在留資格など、労働力の受け入れとして制度化が進んできた中で、こうした生活者として如何に共生していくのか、という視点がどこまで取り入れられていると言えるのだろうか。国際的な人材獲得競争が激しくなる中で、滞在期間の限定やキャリアパス・処遇の問題に加えて、社会への溶け込みにくさ・生活上の課題に直面することで、住み続ける国として選んでもらえるのだろうか。取材の中で、勝部氏が話されていた「せっかく選んでくれたんだから、その人たちに対して、金銭面など、直接的なことは出来なくても、この町は良かったと思って欲しいし、せっかく日本の人たちと

出会ったんだから、楽しい思い出を作ってほしい」という素朴な思いに立ち返る必要性を感じる機会となった。

謝辞：取材にご協力いただいた、豊中市社会福祉協議会の勝部氏と豊中あぐりの会員／多文化共生ボランティアのメンバーの4名の皆様に、改めて深謝申し上げます。

引用文献

- 1) 経済財政運営と改革の基本方針 2018 (内閣府)、<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/honebuto/2018/decision0615.html>、2025年6月アクセス
- 2) 令和6年度 在留外国人に対する基礎調査 報告書 (株式会社サーベイリサーチセンター)、<https://www.moj.go.jp/isa/content/001436052.pdf>、2025年6月アクセス
- 3) 豊中市社会福祉協議会、<https://www.toyonaka-shakyo.or.jp/>、2025年6月アクセス
- 4) 豊中市多文化共生に関するアンケート (豊中市、2023年)、https://www.city.toyonaka.osaka.jp/jinken_gakushu/kokusai/tabunkakyousei/tabunkakyousei.html、2025年6月アクセス
- 5) 多文化共生指針を改訂しました (豊中市、2024年)、https://www.city.toyonaka.osaka.jp/jinken_gakushu/kokusai/tabunkakyousei/tabunnkakyousei.html、2025年6月アクセス
- 6) 豊中あぐり、<http://www.toyonaka-shakyo-vc.org/aguri250123/index.html>、2025年6月アクセス
- 7) 外国人高齢者の「助けて」に寄り添う (三菱UFJリサーチ&コンサルティング) https://www.murc.jp/library/report/seiken_240322/、2025年6月アクセス